

## 能登で想うこと

中橋 毅



石川県に来てまもなく、年男だからと本誌に寄稿させていただいたのがついこの間のように思っていたところ、もう干支が一周して還暦の年が巡ってきた。縁もゆかりもなかった石川県に来てから15年

も経ったとは、時がたつのは早いものである。その15年のうち、ほぼ半分を過ごした能登で私がかかわっている地域医療についての雑感を書かせていただきたいと思う。

能登は世界農業遺産「能登の里山里海」に認定されているとおり、自然豊かであるばかりでなく、その自然に恵まれた伝統的で豊かな暮らしのある地域である。四季折々の味わいを肌で舌で五感で感じることができ、日本酒とブリが好物の私にとってはパラダイスである。また祭りの文化も色濃く残っており、お正月には田んぼの神様をお招きして一年の豊作を祈願する「あえのこと」の行事のほか、各地でキリコが繰り返される祭りなどが行われている。祭りのときには、過疎化が進んだ地域でも若い衆や子供が集まり活気が戻ってくる。しかし、その一方で、能登では高齢化に伴う医療介護需要の増大と過疎化に伴う医療介護の供給量の低下が進行しており、その変化に対応できる社会の再構築が求められている。2025年問題を控えて、能登でも地域医療構想と地域包括ケアシステムの構築に向けての対策が急がれているのだ。

ところで、こちらでしばらく仕事をしていて気が付いたことであるが、私の勤務する穴水町でにぎやかなエリアはどこかと考えてみた場合、かつての能登有料道(現在の里山海道)の終点であった此木付近と穴水総合病院の周辺あたりではないかかと思う。此木はかつて輪島、珠洲、宇出津に向かう道の分岐点であったが、里山海道が能登空港まで延長したこ

とからかつての交通量ではなくなっているが、穴水総合病院付近はバスの行き先が病院と表示されるなど、町の交通の要所となってきている。一般的に町の交通の要所は駅と考えられるが、ここでは病院なのである。そういう視点で能登をみなおしてみると、病院中心の町の構造に変わってきているのではないかと感じる。例えば、金沢は城下町、輪島は港町、門前は門前町、それぞれ、お城、港、お寺を中心に形成された町である。ほかにも学園都市、工業都市、城塞都市など、歴史的に町はその地域が持つ特徴によって形成されてきたと考えられる。しかし、輪島市も最近、病院のまわりに新しいショッピングセンターが発展し、輪島もまた病院中心の構造に町が変化してきているように感じる。おそらく、高齢化率が40%を超える社会が登場して初めて人類の歴史に現れた病院下町なのではないかと思う。

現在、地域医療構想や地域包括ケアシステム構築の過程にあって、能登の医療介護の構造改革が迫られる中、医療の構造を変えることは町の構造を変えてしまうことにつながると考えられるため、世界農業遺産である能登の里山里海の暮らしを維持しつつ、これを実現することが大切と感じている。

(能登北部・金沢医科大学能登北部地域医療研究所 所長)

ISSN 0287-2862

# 石川医報

2018

1の1

第1650号

平成30年(2018年)1月1日 [毎月1日・16日発行] 昭和27年12月27日第三種郵便物認可



洋画 「戌年にちなんで」 (金沢) 村上 英徳



石川県医師会